



Title	ローマ書二文書説の再検討
Author(s)	木下, 順治
Citation	基督教学, 10, 27-29
Issue Date	1975-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46309
Type	journal article
File Information	10_27-29.pdf



ローマ書二文書説の再検討

木下 順 治

これまで「ローマ書二文書説」を発表したのは、日本基督教学会や新約学会での発表等を除き、次の四回である。

(1) 一九六二年、東神大「神学」XXII、「ローマ書の成立について」

(2) 一九六三年、関東学院大「聖書と神学」第八号、「ローマ書二文書縫合説に対する八木批判への反論」

(3) 一九六五年、Novum Testamentum, Vol. VII, "Romans-Two Writings Combined" Brill (Leiden).

(4) 一九六六年、日本基督教教会神学校「教会の神学」I、「ローマ書二文書説再論」

これに対し、私の二文書説全体に対して批判したものは次の二つである。

(1) 一九六三年、八木誠一「ローマ書成立に関する木

下説批判」、関東学院大「聖書と神学」第八号。

(2) 一九七三年、フランシスコ会聖書研究所「ローマ人への手紙・ガラテヤ人への手紙」三四—四六頁。(Dr. B. Schneider)

私のローマ書二文書説の要点は次の諸点である。

(1) 一六章は別個の手紙である(1929年のP.46の発見とT. W. Manson, St. Paul's Letter to the Romans-and Others (1948)により決定的になったとみてよい)。
ローマ書は一五章まで。

(2) ローマ書(一一五章)の前文と後文は異邦人を「あなた方」と呼んでいるのでローマ書の宛先は異邦人であって、ユダヤ人ではない(一・五—六、一三、一五—四一—六)。故にユダヤ人対象の部分は他の文書とみるべきである。

(3) 現在のローマ書には文体の相違がある。

(A) 文章体—異邦人を対象とする部分。

(B) ディアトリケー体—ユダヤ人を対象とする部分(説教ノートと思われる)。

(4) 二文書縫合のあとと思われる継ぎ目に、加筆、語句の変更のなされた痕跡がある。(二・一、七・二五と八・一、三・二—二六の前後、一一・一、一五・四など)。

(5) 二文書に分割すると、異邦人向けの福音の主張とユダヤ人向けの律法の義に対する信仰の義の主張とが夫々明確にされ、論旨が鮮明になる。原ローマ書（異邦人に）一章、二・六―一六、三・二―二六、五・一―一八章、一二章、一三章、一五・一四―三三。ユダヤ人論争書（ユダヤ人に）二・一―五、一七―三・二〇、三・二七―四・二五、五・二―七・二五、九、一〇、一一章、附加として一四・二―一五・三、後と書きとして一五・四―一三。

(6) 二文書が縫合されたのは、教会の礼拝における朗読のためと思われる（おそらくエペソ教会においてであろう）。

○

(1)、シュナイダー師（以下シュ師とする）は当時のローマ教会が異邦人信徒の優勢な教会であったことを認め、八木氏も「ローマ書の対象が異邦人信徒であるということは正しい」と私の主張を認めた上で、律法問題は異邦人にとっても関心事であったはずだからとて二文書に分割することに反対する。私は律法問題や旧約の引用などがユダヤ人を対象にした部分に圧倒的に多いことを指摘しているのであって、異邦人に律法問題は関心がな

かったなどとはのべていないのである。ただローマ書の律法問題はパウロの信仰義認説に強力に反対する人々への論駁であって、このような人々はローマ教会の極めて少数と思われるユダヤ人達とも、またその教会の異邦人信徒達とも考えられないのである。もしそのような人々をわれらの聖書資料の中で取出すとせば、パウロとの接触を考えても、エペソのユダヤ教徒達とみるのが最も適切であると思うのである。(2)、次に八木氏も認めている文体の相違ということがある。ディアトリーベの対象は、あまりに強力迫真であって、単に仮空の対論相手を設定したもの（シュ師）と考えられない。同一教会のユダヤ人と異邦人には夫々文体を違え、一方は第二人称を用い、他は第三人称を用いつつ語ったのであろうか。私にはこれらは二つの別個の文書とみる方がもつと自然であると思われる。(3)、殊に先に指摘したように、前文にも後文にも異邦人がこの手紙の宛先であることが明白にのべられている。これを無視することはできない。宛名としてのべられていないユダヤ人、しかも彼らが極めて少数者であることを認めているユダヤ人に向かつて、あれ丈の強い論陣を張って律法問題を論じているとは考えられない。それともローマのユダヤ人信徒がパウロの信

仰義認説に強く反対しているので、それに反駁している
のであろうか。そんな可能性は使徒行伝の終をみても、
ほとんど考えられないのである。